

2025. 6. 1 (日) ルカ 24 : 50 ~ 53

24:50 それからイエスは、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。

24:51 そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。

24:52 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、

24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

<説教>

本日の聖書箇所には、人として復活なさった主イエス・キリストが天に上げられた、すなわち昇天なさったことが記されています。復活のイエスが昇天の直前にこの地上でなさったこと(50)、そのイエスがこの地上から天に上げられたときの様子(51)、そして地上に残された弟子たちの様子(52-53)です。ルカはその福音書の続編である「使徒の働き」でもその初めの方で改めて復活のイエスの昇天とそのときの弟子たちの様子を記しています(使徒 1:9-11)。

まず、昇天直前のイエスのみわざについてです(50)。先週見たように、また「使徒の働き」にもあるように、イエスは弟子たちに聖霊をお送りになる約束と、聖霊の力を着せられるまでは都エルサレムにどどまっているようにとのご命令とをお与えになりました。そして昇天なさいました。その場所がエルサレムから3kmほどの〈ベタニアの近く〉でした。「使徒の働き」では〈オリーブという山〉(1:12)と書かれています。イエスはそこに弟子たちを〈連れて行き、手を上げて祝福され〉ました。この〈手〉は複数形なので正確には「両手を上げて」です。旧約聖書のレビ記 9 章 22 節に、次のように書かれています。〈こうして、アロンは民に向かって両手を上げ、彼らを祝福し、罪のきよめのささげ物、全焼のささげ物、交わりのいけにえを献げ終えて壇から降りて来た〉。復活のイエスこそはアロンより遙かに優る真の大祭司として弟子たちを祝福なさったのです。イエスこそ私たちのための真の大祭司であることは「ヘブル人への手紙」にも書かれています。そのヘブル人への手紙 7 章 27 節には次のように書かれています。〈イエスは、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のために、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。イエスは自分自身を献げ、ただ一度でそのことを成し遂げられたからです〉。このようにイエスは、私たちの真の大祭司、「神と私たちの間の唯一の仲介者」(I テモテ 2:5)として十字架の上で私たちの罪のためにご自身を宥めのいけにえとして一度限り完全に神に献げてくださいました。イエスは父なる神のみこころに完全にお従いになった「完全な従順のささげもの」として私たちの罪のために、私たちの身代わりにご自身を〈献げ終え〉(レビ 9:22)てくださった真の大祭司なのです。そういう「永遠に変わるものがない大祭司」(cf.ヘブル 7:2)としてイエスは弟子たちを〈(両)手を上げて祝福された〉のです。

〈そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられ〉ました(51)。彼ら弟子たちはもちろん、自分たちを祝福なさった復活のイエスのからだを彼らの目で見、その祝福の肉声を耳で聞きました。既に何度も確認してきたように、イエスは人として、からだをもって復活なさいました。そのことがここでもまた確認されたと言っていいでしょう。そ

のイエスが彼らにそのからだを見せ、肉声を聞かせて〈祝福しながら〉、彼らが〈見ている間に〉(使徒 1:9)天に上っていかれたのです。人としてのからだをもって復活なさったイエスが、そのまま復活者として、からだごと天に上げられたのです。〈そして、雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった〉(使徒 1:9)のです。こうしてイエスは地上の〈彼らから離れて行き〉ました。この〈離れて〉という語は「隔離されている。区別されている」ということを強調したものだそうです。こうして復活者イエスは、弟子たちがいる地上とは違う〈天〉に上げられました。その〈天〉とは、もちろん弟子たちの目に見える「空」でもなく、天体望遠鏡で見る「大宇宙」でもありません。〈主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。〉(マルコ 16:19)とあるように、〈天〉とは今は私たちの肉眼では見ることのできない、まさに「天の御国」であり、殊にその〈神の右の座〉のことなのです。だからイエスが〈彼らの目には見えなくなった〉のは、彼らの「視力」が及ばなくなったからではなく、地上とはいわば本質的に違う場所であり、神がいます〈天〉に上られたからでした。イエスを包んだ〈雲〉も神の臨在、神の栄光を表すものだったのでしょう。そこは地上の私たちが制限されている物理的、空間的、時間的等の法則を超えた場所です。私たちの地上の感覚では見ることも知ることもできない場所、今は聖書のみことばと聖霊によって、信仰の目で見、信仰で知るほかない場所です。しかしイエスは復活した人としてからだをもってその〈天〉に上げられました。それは〈上げられた〉と受身形で書かれているように(「よみがえられた」が「よみがえらされた」と受身形なのと同じでしょう)、神の力によって為された、神のみわざでした。だからこそ物理の法則にも逆らって、その制限を突破してイエスは人として、復活のからだごと〈天に上げられ、神の右の座に着かれ〉ました。そして今私たちのために神にとりなしていてくださっています(cf.ヘブル 7:24-25。ローマ 8:34)。

最後に、地上に残された弟子たちの様子です(52-53)。もちろん彼らはこれまでもそれなりにイエスを礼拝していたはずですが。しかしこれまでのものはイエスの復活については分からない、信じられない、いわば薄く小さな信仰で礼拝していたわけです。それ故、結局死への恐れ、自分たちを殺すことができる人への恐れがありました。イエスに従って行っても、それで殺されたら、死んだらどうしようという心配がありました。しかし、復活のイエスによってそれらの心配や恐れが取り除かれました。また、自分たちはイエスを裏切り、見捨ててしまったという罪の負い目もありました。しかしイエスは自分たちを見捨てず、復活のご自身を現してくださり、イエスの証人としてくださり、聖霊の力を与えてくださる約束をしてくださいました。彼らはイエスを復活させた父なる神の力、また御父の約束の聖霊をお送りになるイエスの力を知りました。復活のイエスのみことばによって、彼らはイエスには〈天においても地においても、すべての権威が与えられてい〉(マタイ 28:18)ることを知りました。使徒パウロは、神がイエスを〈高く上げて、すべての名にまさる名を与えられ〉(ピリピ 2:9)たと言いました。ですからイエスが天に上られたことで、イエスの栄光が現され、イエスが神として礼拝されるべきお方としてますます明らかになったのです。今考えてきたようことの故に、彼らは〈大きな喜び〉に満たされました。そして当然イエスのみことばに従って都にとどまるべく〈エルサレムに帰り〉、〈いつも〉とは定められた日時には、ということでしょうが、神殿で公に集い、イエスについて聖書に書いてあることを成就させ、イエスを死者の中からよみがえらせなさった〈神をほめた

たえていた〉のです。

復活し天に上られた主イエスは今も天の神の右の座におられ、生きておられ、罪深い私たちのために大祭司として神にとりなしてくださっています。また祝福された地上の人生、そして天での永遠のいのちの祝福に招いてくださっています。その主イエスを信じる私たちもまた復活のからだをもって天に召していただけるのです。その信仰と希望をもって、まずは今生かされているこの地上で神を、イエスをほめたたえ、礼拝し、イエスの証人として、神に従い、神の栄光を現して歩みましょう。